

## 今もデリヘルを続ける女性たち 離婚準備中「夫頼れぬ」

🔒 有料会員記事 三 新型コロナウイルス

小木雄太 2020年5月24日 11時45分



栄町のソープランドで働く女性は取材に「せきをするお客もいる。やっぱり怖い」と語った=2020年4月27日午後6時51分、千葉市中央区、小木雄太撮影



新型コロナウイルスは夜の街にも大きな打撃を与えた。多くの性風俗店やラブホテルがひしめく県内有数の歓楽街「栄町」（千葉市中央区）。コロナ禍でも、ここで働き続ける女性や店主たちの声を聞いた。

5月上旬の夕方。栄町に人影はほぼなかった。だが、ここには昔からある店舗型のソープランドだけではなく、派遣型のデリバリーヘルス（デリヘル）やイメージクラブなど、多様な形態の性風俗店があり、立ち並ぶマンションのどこかで女性たちが待機している。客の男性がラブホテルに入ると、女性が後からホテルの部屋に来る仕組みだ。インターネット上で見ると、100店舗以上の性風俗店が栄町にある。

「この業界は基本、その日稼いだ金で生きていく自転車操業の世界。自分も家族がいるし休みたいけど、店を閉める余裕はない」

栄町で15年以上デリヘル店を営む男性オーナー（42）は言う。栄町、船橋、柏、松戸の計4店舗を経営し、250人の女性が在籍するという。店のホームページでは、多数の若

い女性たちが顔をぼかして紹介されている。夕方以降の料金は60分で総額2万円程度だ。

県は4月14日に休業要請を出し、そこには店舗型や派遣型の性風俗店も対象に入った。男性オーナーは「店を休んだら、事務所の家賃や広告料が払えなくなる」。休業要請後も4店舗は時短営業を続けたが、先月の売り上げは普段の3分の1ほどに落ち込んだ。中小企業に最大200万円が出る国の持続化給付金も、性風俗店を営む事業者は対象外となっている。

在籍女性の多くは「在宅勤務で家族が家におり、そこで外出すれば仕事がばれる」「感染が怖い」などの理由から、次第に出勤を見合わせるようになった。一方で、生活のために出勤せざるを得ない女性もいる。

感染拡大に伴い、医療事務の仕事を辞めた女性（21）もその1人だ。

医療事務の仕事に就いたが、人間関係がうまくいかず、うつ病に。休職と復職の末、コロナ禍で勤務日数が大幅に減ったのを機に「仕事もつらく、お金も稼げないなら辞めよう」。副業だった同店の仕事を本業にした。

同居していた交際相手と別れ、会社が事務所として使う部屋に寝泊まりする。仕事では消毒などの感染対策はしているが、接客サービスの内容上、万全とは言いがたい。「感染は怖いけど、自立するために少しでも稼ぎたい」

別居中の夫との離婚準備を進める女性（21）も、昨年末から同店で働き始めた。県内の実家で就学前の長男を育てながらの生活。「夫は頼れないし、ほぼシングルマザー。いずれは実家を出なければならず、普通の仕事より稼げる業種で出来るだけ働きたい」と話す。「それに、この仕事は好き」とも言った。

ソーブランドで7年近く働く女性（30）は、ホテルと漫画喫茶を転々としながらほぼ毎日出勤していた。

同居していた相手と別れ、春に新居を探す予定だったが、新型コロナで客が激減。こ

れまで1日平均4~5人の接客をしていたが、今は多くても2人で、客がつかない日もあったという。給料は歩合制のため「30歳だし、お金をためて辞めようと思ったが、こんな状況じゃ無理」とため息をついた。

この店は緊急事態宣言後、約2週間休業し、4月下旬から再開した。80人以上在籍するという女性のうち出勤しているのは十数人。先月の売り上げは普段の2割まで落ち込んだ。感染対策として、客には来店時や退店時に手指の消毒をお願いしている。男性店長（28）は言う。「貯蓄があれば、こんな状況で店には出ない。出勤しているのは、すぐにお金が必要な子ばかり。要請に従って休み続けたら、そんな女の子たちも、栄町の大半の店も、つぶれてしまう」（小木雄太）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.